
青春まっさかり！？

akoko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春まつさかり！？

【Nコード】

N1098W

【作者名】

akoko

【あらすじ】

私の名前は小林桃子です。

私はいま、絶賛恋愛中です！

え？片思いは恋愛にはいるんですか？って？

入るに決まってるじゃない！

入るのよ！

とにかく、その子の名前が、中村美和ちゃんっていうのよ！……！……！
ちよう可愛いわけよ……！

私と美和ちゃんの永遠ラブストーリー↑

桃子「はっじまー」美和「いいかげんにしなさい！」

失恋が何ぼのもんじゃい！（前書き）

（注意）

変態話です。

変態がいます。

BL好きの子が出てきます。

百合です。

暇なときにでも読むといいでしょう。

↑

失恋が何ぼのもんじゃない！

失恋……

っは、そんなんでもってやっつけてけないわよ！

私の名前は小林桃子です。

私はいま、絶賛恋愛中です！

え？片思いは恋愛にはいるんですか？って？

入るに決まってるじゃない！

入るのよ！

とにかく、その子の名前が、中村美和ちゃんっていうのよ！……！
ちよう可愛いわけよ！！

その子に、何回もふられてるんですが、まあ、あきらめられないわけです！

美和ちゃんは、顔も可愛くて、明るくて、声も可愛くて、仕草も可愛くて

もう、ゼンブが可愛いわけですよ！

そろそろ、本編始めてください？

まだまだこれからよ！！！！

それでね、美和ちゃんはBL好きの腐女子なわけですね！

まあ、うちも腐女子なんですけど、

それで、話が合うわけですよ！

小6までは仲良くしゃべってましたね。はい。

でも、中学に入ってから美和ちゃんが、冷たくなってきた……。思春期ですねわかります。

でも、うち以外にはデレデレなんですよね……。なんでだろう……

うちにはツンの部分しか回ってこないんですね・・・
どういことったあ。。。

でも、大好きなんですよね・・・

あ、そろそろ、本編に行きましょっか！

春。

春。

新学期でドキドキの季節です。
ですが、そんな中、変態が一人。

桃子「みわちゃあああん!!!」

美和「っ!? あ、桃子ちゃん」

桃子「今日も可愛いね!!!」

美和「気持ち悪い変態!!!」

桃子「えー、そんな事いわないでよー」

美和「あのね! 私はリアルではノーマルでいきたいの!」

桃子「えーえーえー・・・とりあえず、結婚しよう美和ちゃん!」

美和「お断りします」(キッパリ)

と、小言を言い合ってた

なつ「まあーたやってんのかwww」

みこ「桃子もこりねーなあー」

桃子「あ!!! みこちゃんとなつみちゃん!!!」

美和「助けてなつみちゃん」

なつ「どうしたの美和ww」

美和「へんたいがあゝ」

ああ、今日も可愛いです美和ちゃん!!!
とりあえずなつみちゃんそこかわれ!

みこ「桃子・・・、おまえ、中2になっても何もかわらないのねww」

桃子「うるせー、みこに言われたくネーよ!」

みこ「フツ、正直言って私のほうが好かれてるからね」

桃子「いや、そんなことないね!ね!美和ちゃん!」

美和「えー、やっぱりみこちゃんのほうが好きだな」

みこ「美和ちゃん!」

美和「みこちゃん!」

ガシ・・・

ちくしょう・・・見せ付けないなああああああ!!

なんで、うちばっかり、ツンが回ってくるんだこのやろっ!!
ああ、抱きつきたい抱きつきたい・・・

なつ「美和ー桃子が抱きついてもいいですかだってー」

桃子「いやなｵ・・・ 美和「キモイ変態、こっち見んな（ズバツ」

な、なんで、心読めたの!?
あなた天才!?

みこ「へへへーざまーみる!」

桃子「ちくしょう、オマエばつかずるいぞ!」

美和「あー、でも、結婚するならなつみちゃんがいいなあー（デレデレ」

ま、まさかの衝撃告白!?!だとお・・・

桃子「美和ちゃん!?!付き合ってください!?!」

美和「桃子ちゃん・・・」

桃子「は、はい・・・（ドキドキ」

美和「死んで??（キラキラ」

桃子「え、いや、え、ちよつとええええ!?!」

桃子に1000のダメージ。

ふられましたね^p^

まあ、慣れてるんですけどね^p^

ちくしょう、可愛いなコノヤロウ!!!
↑

なつ「そうそう、みんなクラス一緒だよね」

美和「また、変態と同じクラスか・・・」

つ、ついに名前じゃなくなっただとお!?

桃子「えええーそんなーみわちゃああん」

美和「近寄るな変態!!!」

みこ「あ、桃子が罵られて喜んでる。」

桃子「えっ!?何でばれたの!？」

美和「キモイ変態!近寄らないであと、星になってきて!!!!!!」

桃子「えええええーえー!？」

まあ、そんなところも可愛いんですけどね・・・ウヘヘ

え、いや、うちはドMとかそんなんじゃないくて心が広いだけです。
はい。ここテストに出ますからね!?

美和「あ、早くしないとチャイムなるよ!!!」

桃子「では、私がお姫様抱っこd・・・ 美和「ウザイ！（キツパリ」

桃子「えええー！そんなぁ。。。 ってまってよ、ちょ、みんな足はやっ！？」

変態の担任（前書き）

BL表現がほんの少し入ります

変態の担任

担任「はい。皆席に着けえー・・・って、また変態の担任かよ！？」

桃子「し、しつれいなっ！？変態じゃないですよー！？」

みこ「おちつけ、そして現実を見る。」

桃子「え！？なに！？それは認めなさいって意味ですか！？」

担任「まあー静かにしろよー」

桃子・みこ『はい』

先生が、たんたんとプリントを配っている最中、桃子とみこは席が近いから
言い合いをしていた。

桃子「やっぱ、4 2 1 3にきまつてるだろー！？」

みこ「いや、1 3 4 2だろお！」

桃子「おまー！？イザ。の可愛さがわからんのか！？」

みこ「おまえこそ！シ。ちゃんの可愛さがわかってないねー！？」

桃子「いや、。ズちゃんの腕にすっぽりはまるイ。ヤの可愛さがわ

かってない！大体体格さは重要だ！」

みこ「そんな事いったら、。親はどうすんのさ！！」

桃子「アニキは総受けおkなのよ！！」

みこ「それは、わかる。」

桃子「いつも、ガツガツしてて、一見攻めに見えるけど、押しに弱いとか・・・」

みこ「ほら、だろ！？じゃあ1342いいじゃん！」

桃子「考えてみたらそうかも・・・」

担任「おい、その腐女子ども、落ち着け！」

みこ・桃子「サーーセンww」

この後、先生に、説教されたことは言うまでもないだろう。

美和「もー、二人とも遅いよー」

なつ「どうだった？？」

みこ「いや、普通にねえ？」

桃子「だな、普通だった。」

なつ「どんなかんじだった？」

桃子「先生は攻めだよーってみこと、こそこそ話してたからよく聞いてないわw」

美和「あ、私もそれおもったあー！！先生は攻めだよー！」

なつ「先生つてさあー教頭と仲いいよねいつもww」

桃子「おお！フラグたちまくりだね！！ということで、美和ちゃん！」

美和「??」

桃子「うちとフラグつくろうじゃないか！！」

美和「はあ！？誰が作るか！変態！！」

みこ「美和ちゃん！うちとフラグ立てまろうか」

美和「いいよー」

桃子「な、何この温度差は！？もついいもん！なつちゃんとイチヤコラするから！！」

なつ「それは結構です。（）（キリッ）」

桃子「なつちゃあああん！」

新学期最初の下校は
いつもと変わらぬ様子でした。

夜の小言という名の妄想壁

桃子「あー、今日の美和ちゃんも一段と可愛かったなあー」

といいながら、p i o i v に投票されてる、すばらしい絵や漫画を読んでいた。

桃子「あ、メール届いてる。」

送り主を見たら、美和ちゃんだった。

桃子「どんな、メールだろう。。。たとえばあ・・・」

『あ、あのね・・・い、今から私の家にこれですか・・・いま、お母さんとかいなくて・・・寂しいんだ・・・』

桃子「ぜひ飛んでいかせてもらいます！・・・それとも・・・」

『今日は、ひどい事いつてごめんね・・・ホントは大好きだよー』

桃子「それも捨てがたいな・・・」

そんな感じの妄想を頭で繰り広げながらメールを見てみた。

『桃子ちゃんへ』

明日、8時集合ね、遅れないでね!』

桃子「……可愛いなコノヤローー」

時間を見ると、午前1時過ぎ。

桃子「そろそろ寝ないとおきられないな」

学校めんどくセー

とつぶやきながら電気を消した。

明日は……

明日こそは……

デレってくれるかな……

桃子「おやすみー。」

誰もいない天井に声をかけて眠りについた。

あーさーめがさめてー

ぴぴぴぴぴぴ・・・

目覚まし時計のうるさい機会音が部屋に響く。

桃子「えーと、今、7：05分ね・・・もうチョイいける・・・
zzz」

五分だけ分だけ・・・

少し瞬きをするかのようにつぶつた・・・
だけなのに・・・

「ももこー？もう7：50分よー」

桃子「まじかよおおお！？」

お母さんの言葉とともに
飛び起き、かばんをしょって、

桃子「いつてきまあああああすー！ー！ー」

いきよいよく飛び出した。

みこ「おお、桃子ギツリギリー」

なつ「桃子よくまにあったねww」

美和「よし、ほめてあげよう」

すると、美和ちゃんの手が、自分の頭を優しくなでなでしてくれた。

桃子「ふおおおおおおおー!!」

なつ「よかったね、桃子ちゃん」

桃子「うん!!!!」

美和「はやくー、おいてくよー?」

桃子「あ、いまいきますよー」

今日はなんだかついてそうだな」

と、鼻歌交じりに美和ちゃん達のもとへとはしった。

誰だよあんた！（前書き）

（・A・）つ【腐男子投入】

誰だよあんた！

私の恋路に

敵は一匹たりともゆるさねーぜ！！

美和「だよねー！！」

「やっぱ、エドは受けだよな！！」

その、にぎやかな光景を、見つめていたのがいる。

桃子「何あの男！！？」

みこ「あいつあ、隣のクラスの晃平とかいうやつだぜ・・・」

桃子「こうへいい！？だれだそいつ！？うちの美和ちゃんをおお」

みこ「うちも、許せないね、よし、ココはてをくもうじゃねーか！」

桃子「そうだな・・・ココは手を組んであいつを引き離すとするか。
。。。」

そうして、桃子とみこの暗殺部隊が誕生した。

桃子「とりあえず、晃平ちゃんと仲良くなり」

みこ「協力してると見せかけ」

桃子「あるときに『あ、そういえば美和ちゃんが嫌いっていったよ』作戦でいこう!」

みこ「いやぁー精神的についてきますね桃子さん」

桃子「半分はお前が考えたんじゃないですかみこさん」

みこ「桃子さんも悪ですねえ」

桃子「みこさんほどではないですよ」

桃子・みこ『ヒッヒッヒッヒ』

美和「ねえ、なっちゃん・・・あの二人の不気味な雰囲気はなに・・・」

なつ「私にもさっぱりでございます・・・」

美和「まあ、面白そうだからほっとこうか」

なつ「そうですねー何をしてくるか楽しみです。」

覚悟しとけや、晃平君とやら・・・

トウダイモトクラシ

とりあえず、美和ちゃんに晃平君のことでも聞き込もうかね・・・

桃子「美和ちゃん美和ちゃん！」

美和「ん？？？」

桃子「晃平君ってどんな人なんですかね？？」

美和「んー・・・面白い子だよ」話も合うし」

桃子「どんなのが好きなんですか？？」

美和「東方っていうゲームとかAPHとか薄桜鬼とかがすき見たいです」あと、ハガレンもすきっていつてた！」

・・・意外と、というか、完璧に興味がうちと一致しているだとお！？

晃平恐るべし・・・

とりあえず、なつみちゃんと美和ちゃんを先に歩かせてみこを後ろに連れ込んだ。

桃子「趣味は完全にうち達と一致している。」

みこ「まじかよ!？」

桃子「いやぁーびっくりしたよ・・・あの晃平君が・・・」

みこ「だから、美和ちゃんと話が合うわけだ・・・」

桃子・みこ『晃平恐るべし!!!』

うちは、みこと同じマンションだから

途中で美和ちゃんとなつみちゃんと別れた。

みこ「桃子、ひとつ重大な発表がある。」

桃子「な、なんだ!？」

ドキドキしながら聞いてみると

どうやら晃平はうち達と同じマンションに住んでいるということがわかった。

桃子「まじかよ!??ぜんぜんきずかなかった!」

みこ「いや、うちもさっきまでわからなかった」

桃子「ど、どどういうことだ!？」

お金は小さいころからためなさい！

晃平はうち達がアニメやら漫画やら知っていることを
美和ちゃんから聞いていたらしく、なぜか家に招待された。

桃子（なあなあ、男の家に女の子誘ってどうおもう？）

みこ（だよな、それすごく思った。）

桃子（まあ、いいか。）

そんな感じの会話を

コソコソと話していたら

晃平の家の前についていた。

晃平「ちよつとまっててね！」

ガチャツと少しドアを開けると中を確認して扉を閉めた。

晃平「お母さんいないからはいっていいよー」

桃子・みこ「おじゃまします」

晃平の部屋に入ると
いたって普通だった。

桃子「ふ、普通だとお！？」

みこ「いや、絶対どこかに隠してるはずだぞ」

桃子「ありがちな、ベットの下とか!」

ありがちで流石にないだろうとおもい
ベットの下を覗いてみた。

桃子「・・・ちょｗｗｗｗま、まじであつたぞｗｗ」

みこ「まじかよｗｗｗｗ」

桃子「しかもめっちゃすごい量なんですけどｗｗ」

みこ「おまｗｗｗドンだけ金持ってんねんｗｗ」

晃平「銀行に30万円以上はいつてるよ」

桃子・みこ『え!?!』

おもいもよらない金額にうちとみこは目を見開いた

みこ「うそだろ!?!」

晃平「ほんとだよー、しかも、それ全部親に隠して買ったし」

桃子「こ、このノートパソコンも!?!」

晃平「ん? ああ、それもそうだよ」

みこ「ネットとかにつないでねーの？」

晃平「残念ながら・・・親には内緒で買ったしね」

敵は意外といいやつだった。

晃平「・・・実はさ、生まれたときからずっとお年玉ためてたんだよねえー」

桃子・みこ『ええええええええええ！？』

あ、ありえない・・・
子供のころは

「お母さんが預かつとくね」

とか、いわれて、受け渡したらもうすでに使われてて
自分でやつと管理できるようになったってお母さんに聞いたら

「それはあんたの生活費に消えました」

とか言つて消えてたりするのに！？
お母さん優しすぎるだろ！！

桃子「30万って、おまww分けるやww」

みこ「分けるのがいやだったらゲームかってくれ！！」

晃平「いや、お金上げる気はないからね！？」

桃子・みこ「けちな、おまえ」

晃平「いや、けちもなにもないからね！？」

ふと、横を見ると
漫画が高く積み重なっていた。

桃子「おまｗｗ漫画めっちゃもってるなｗｗ」

みこ「今度貸せよなｗｗ」

晃平「いいよ、貸すぐらいなら」

桃子「お前いいやつだな！」

褒め称えていたら

みこが急に

みこ「おなかすいたー」

桃子「うちもお腹すいたー」

晃平「なんかもってこようか？？」

桃子「よろしくおねがいします」

コンソメソメソ

晃平「これでいい??」

晃平の手を見ると

ポテチ（コンソメソメソ）味を持っていた

桃子「これうち大好きなんだよねー!」

みこ「うちもうちも!」

そういうと早速袋を開けて
パリパリと食べだした。

みこ「そういえばさ、東方のグッズばっかあるけど、東方と美和ちやんどっちがすきなわけ?」

桃子「ああ、そこ重要だよね!」

とりあえず、本当に気があるのか。
うちの勘違いなんじゃないか、ということを知るため
問いかけてみた。

晃平「・・・・・・・・・・」

桃子「・・・・・・・・」

みこ「・・・・・・・・」

晃平「お、おなじくらい・・・かな・・・」

桃子「お、おま、それってめっちゃ好きってことだな!？」

晃平「い、いやべつにそんな」

みこ「じゃああの間はなんだよ間は!」

桃子「まあ、ちがうってんなら違うでいいけどさ」

みこ「とりあえず、協力するしな!」

晃平「（完全に、ばれたか）あ、ありがとうございます」

桃子「そうそう、晃平とき、美和ちゃんってどこで知り合ったの?」

晃平「去年同じクラスでした。」

桃子「ああ、そういうことね。」

去年は違うクラスだったからな・・・

みこ「っあ、うちそろそろ、帰らないと」

ふと時計をみるとあれから30分たって
5:40分になっていた

みこ「これから塾なんだよねー」

桃子「じゃあ、そろそろ帰らせてもらつよ」

晃平「おう！んじゃな」

うちはたちは無言で手を振ってエレベーターに乗った。

桃子「じゃーねーみこ」

みこ「じゃーなー」

あー・・・ダライ・・・

あー・・・

だるい・・・

頭痛い・・・

のど痛い・・・

桃子「じぬう」

なんてこつたい・・・

風邪ひいちゃったよ。。。。

とりあえず、みこにでもメールしとくか・・・

みこ「っあ、メールだ。桃子からかよ・・・」

『今日、風邪ひいたから休むね〜よろしくー』

美和「今日は休みなんだね」

みこ「!？」

後ろから声がしたので振り向くといつの間にか美和ちゃんが立っていた。

なつ「今日は休みなの??桃子ちゃん」

美和ちゃんの声が聞こえたからか、なつちゃん心配そうに聞いてきた。

みこ「うーん、まあ、桃子のことだから大丈夫だろ」

美和「でも、今日って桃子ちゃんのお母さんいない日だね」

そう、桃子のお母さんはときどき3週間ぐらい家を空けることがある。

なつ「まあ、行きましょうか」

美和「そうだ!皆で、おみまいに行こうよ!」

みこ「ああ、そっだな」

ということ放課後、桃子の家にお見舞いに行くことになった。

皆が来る前には・・・

・・・あれからどれだけ時間がたっただろうか・・・

寝てはさめての浅い眠りを繰り返していた。

桃子「ああゝぜんぜん直った感じがねえ・・・ゴホゴホ」

そういえば、薬飲んでなかったなと、ふと思う。

時計をみるとお昼すぎ。

桃子「・・・しんどいゝあたまいてえ・・・まじで、じぬ、ゝ、

」

そうつぶやいていたら

携帯がなった。

携帯をみると

みこからメールが来ていた。

桃子「おお！今日、ゲホッお見舞いに来てくれるんだあゝゴホッ」

このときまでには元気に・・・なっとかないと・・・

思い体をベッドから起こしふらふらと台所に行き、水をいれ薬を飲んだ。

早く直つてくれよ……うちのかぜえ……
皆が来る前には……

そうつぶやいて、またベットに横になった。

元気なフリ

ピンポン

桃子「あ、来ちゃったよ・・・」

そうしよう・・・

あれからいっこうに熱下がってないしな・・・

とりあえず、元気なフリをしとこう・・・

だいぶしんどいのを絶えながら

玄関まで行き、鍵を開けた。

上手くできるかな・・・

桃子「やつほー」おみまいありがとう！」

美和「・・・ナンダ元気ジャン・・・」

なつ「元気そうでしたあー」

みこ「・・・」

桃子「えーそんなことないですよー、元気なわけがないじゃないですかー」

みこ「お前、今日一日何して過ごしたんだよ」

美和「もしかして、しんどくないからゲームとかしてたんじゃない
でしょうねえ・・・」

桃子「え、あ、そ、そんなことないですよー」

なつ「あやしい・・・」

美和「まあ、元気そうでよかったわ」

なつ「うちたちこれから塾だから、先かえるねー」

桃子「うん！お見舞いありがとう！」

美和「遊びすぎて悪化しちゃダメだよ！」

桃子「ハイ」

短い返事をする

美和ちゃんたちは帰っていった。

みこ「おい、桃子。」

幼なじみはおみとおし

桃子「な、なに??」

ああ、やばい。。

クラクラする……

でもまだ、みこが……

みこ「……お前、まだ全然しんどそうじゃねーか……」

桃子「そんなことないってー」

やべえ……

ばれてたか……

だてに付き合いは長くねえからな……

桃子「大丈夫大丈夫……」

みこ「ホンとか?」

ああ、やばい……

たってるのが……

やっただ……

視界が……ダンダン……狭くなって……く……

みこ「はあ、無茶すんなよな・・・」

うちがいなかったら、今頃お前はおもいつきし、地面に叩き落されてたからな

感謝しろよな・・・

みこ「とりあえず、ベッドにでも、寝させておくか・・・おじやまします。」

短く挨拶をいい近くの部屋のベッドに桃子を寝かせて台所に向かった。

みこ「しょうがねーからおかゆでもつくってやるかって・・・おい・・・」

そこには、ろくに洗ってないお皿がたくさん積み重なっていた。

みこ「はあ・・・しょうがねーなあ」

積み重なったお皿を洗いながら

みこ「・・・お礼はきつちりいただくからな・・・」

この思いは届くのかな

やっと、お皿をかたずけたので、おかゆを作り始めて桃子が寝ている部屋に

様子を見に行った。

みこ「あー、全然下がらんな・・・」

おでこにそつと手を当ててみるととても熱かった。

みこ「ひえぴたはつとくか・・・」

そういうと、棚の中に入っていたひえぴたを取り出し、桃子のおでこにくつつけた。

桃子「ンンッ・・・」

あ、やべ・・・

おきたらどうしよう・・・

みこ「セーフ」

べつにどうせ起こすからおきてもよかったが、この寝顔をもう少しだけ見たくなった。

みこ「ばーか・・・」

うちがどんな思いかも知らずに
美和ちゃん美和ちゃんって・・・
確かに、うちも大好きだけど・・・
なん・・・か・・・な・・・
まあ、この思いはちゃんと伝えないと相手もわからんだろうかな・・・

すこしだけ、桃子の寝顔を見てから
台所にいって、おかゆをおさらいにいた。

みこ「ああー起こすのもつたいないけど、栄養つけねーといけない
しな・・・」

桃子のほつぺたをペチペチと軽くたたくと
まぶたがシヨボシヨボしながらあいた。

桃子「ン・・・あれ・・・なんでみこが・・・??」

みこ「お前が倒れたんだろうが」

桃子「そ、うなのか・・・助けてくれてありがとな!」

みこ「・・・ッどういたしまして・・・」

桃子「どうしたんだ?顔が赤いぞ???うつってないだろうな!」

みこ「大丈夫だよ・・・まったくも・・・てか、あんたお皿ろくに洗
ってなかったでしょう!」

桃子「あ、分かつちやいます？w w」

みこ「わかるわw」

桃子「で、はやくおかゆとやらを食べさせてくれー」

みこ「食欲あんの？」

桃子「いや、特にないけど。ないって言っても食べさせるだろw」

みこ「ご名答w w」

この思いは届くのかな（後書き）

しばらく更新してなくてすみません！

基本不定期なので。。

よければこれからも見ていってください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1098w/>

青春まっさかり！？

2011年10月12日02時01分発行